

令和7年度 校内研究報告書

1 研究主題

知的好奇心を育む発問の在り方

2 研究目的（目指す姿）

児童生徒の知的好奇心を発問を通して刺激し、主体的な学びを促すための授業実践力の向上を図る。

3 研究の実際（具体的取組）

（1）子どもの学習の質を高める実践研究

○発問に関する知識や知的好奇心の向上と子どもたちの学びに対する姿勢との関連、児童生徒の目指す姿の共有

○知的好奇心を育む発問の定義づけ

（2）全ての教員による実践活動

○単元指導計画の作成

・学年の目標を設定し、単元の内容や時間のまとまりを見通す。

○発問計画表の作成

・単元指導計画で設定した目標を意識し、各時間のねらいを達成するための効果的な発問を具体的に計画する。

○上記の計画をもとにした授業実践と研究協議

・拡散的好奇心と特殊的好奇心など、発問のねらいを明確にし、予想、反応を共有する中で、効果的な要素を考察する。

○研修会の実施

・知的好奇心を育む発問の在り方 高橋達哉

・教育コーチング研修 沖津亮祐

・「やってみたい」から「もっと知りたい」につなげる授業づくり
新井英靖

・校内研修ちよこっとラーニング（用語の共通理解と演習）

「発問と質問」「知的好奇心」

4 成果

○拡散的好奇心の向上

- ・「なんだろう?」「おもしろそう!」といった、学びに対する興味関心を広げる段階において、児童生徒の授業への参加意欲が高まる成果が得られた。

○知的好奇心を育む指導方法の共有

- ・授業実践とグループ協議の振り返りを通じて、5つの重要なポイントをまとめた。
 - ①実態に応じた段階的な発問
 - ②学ぶ「必然性」と「揺さぶり」
 - ③振り返りの時間と「余白」の確保
 - ④言葉の精選と非言語への着目
 - ⑤「思考の深掘り」と「根拠」を問う発問

5 課題

○好奇心の深化

- ・拡散的な興味を物事を深く掘り下げる力(特殊的好奇心)へと進化させることが今後の焦点である。

○共通理解の徹底

- ・教員間で知的好奇心の定義に個人差があり、発達段階に応じた具体的なアプローチの検討がさらに必要である。

○評価方法の構築

- ・「特殊的好奇心」が高まっていることを客観的に判断するための具体的な見取り方や評価指標が確立されていない。

6 次年度の方向性

○個別最適化を意識した環境・授業づくり

- ・児童生徒一人一人の実態に合わせ、グルーピングや授業形態を工夫し、最適な学習環境を整える。

○「ストーリー設定」による単元の構成

- ・単元全体のつながりを意識し、児童生徒が学習の見通しや必然性を持てるような展開を設計する。

○「思考の深掘り」を促す発問の精選

- ・知的好奇心を引き出し、思考を深めるための具体的な「発問」を精査する。

○自ら気付くための「余白」と「待つ」姿勢

- ・児童生徒が自ら課題に気付くための時間的・心理的な余裕(余白)を持ち、内面的な探究を待つ姿勢で取り組む。